

# Orthographie の変遷から見た Neuhochdeutsch の成立

## — 第 二 部 —

荒 木 泰

第一部 (人文論究第6巻第6号) に於て 既述の如く、本稿の意図は現代高地ドイツ語の成立を綴字の面から辿ってみる処に在る。従って、音韻論・文章論の領域には、綴字法との関連に於て以外には触れないものである。

第一部では Frühneuhochdeutsch (以下 Frnhd. と略す) 時代の綴字法一般に就いて、句読点・長音・母音の各記号乃至綴字を概観したのであるが、今回は残る子音記号に移り、次いでルターの所謂九月聖書について、その綴字法を当時一般の慣行と比較検討してみる。蓋しこの九月聖書こそは、ドイツ語史上に於て Frnhd. から Nhd. への唯一ともいえる橋梁であり、又出発点でもあることが、今日一般に認められているからである。但し、Orthographie と表裏をなす音韻に関しては、同種の考察は必要ではあるけれども、問題が余りにも複雑である。ルターの採択した語彙が、多分に中部方言的であるにもせよ、彼の生地であるマイセン地方語が必ずしもその主流をなしているとは限らず、多種多様に亘る諸方言中から、不特定に抽出された語彙の群を etymologisch に遡及することは、異邦人

の我々にとって殆んど近づき難い領域といえる。当然、余された途は Orthographie と syntax の問題であり、ここにルターの Orthographie を採り上げて、その中に Nhd. との結びつきを尋ねることは、かかる事情に基く。

#### Ⅳ. 子 音 記 号

gantz, krannck, offtt, hillff の如き、音韻的根拠を持たない子音記号の頻出と重複は、Frnhd. 時代の綴字法に、主要な特徴を与えるものである。その萌芽は既に古くから見られるが、13世紀（以下 Jh. と略す）後半になると強く現れて来ている。一見甚だ非能率的なこの用法は、一つには繁文縟礼を事とする宮廷によって促進され、料金を少しでも増そうとする筆写業者にも愛用された。

ハプスブルク家支配の 15Jh. 後半になって、この用法は最高潮に達した。活字印刷術の出現は、かかる非合理性を当然排除するものと思われるにもかかわらず、既に慣用となった煩雑な綴字は、九月聖書をも含めたルターの全著作にも、猶強くその跡を留めている。

#### 異種子音の重合

1, 現在 z, tz, ts, ds と綴られる摩擦音に対しては、tz, cz, zc, tcz, tzc, czc, czz, zcz, czcz, czzc 等多数の綴り方が存在し、あらゆる母音の前、及び Anlaut にも用いられている。

2. z の摩擦音は Mnd. では 3 とも書かれていたが、この時代には最初 sz（時に zs）と綴られ、これが 16Jh. の30年代まで残っている。後に之を ß で表すのが流行すると、元の性格を失って ss と同価値のしるしとして見られる様になり、遂には s の重複として扱われるに至っている。従って現代正字法で ß と綴られるものの中には、本来 s のものと z の

### Orthographie の変遷から見た Neuhochdeutsch の成立

ものがあることになる。例えば、Verdruß は mhd. verdrieß から、Fluß は同じく vluz から来て共に Z 系であり、現今の ß は多くこの系統に属するが、接頭語 miß- の如く mhd. misse- で ss の代用として用いられて来た ß も残存している。Frnhd. 時代の ß は更に複雑であり、hauß, auß 等の他、14Jh. 末の印刷には、Bo, Ber (sehr), Bollen の如き用法も現れている。又、Hans Sachs の作品中 (1516年) には、前記 Verdruß が vrdrütz と表されて居り、音韻的にも r と z の混同が介在して来るから、事は一層に面倒である。

(註) 現在の das と daß は、元来 Mhd. では一つの da3 であつたが、ich hore das : er kommt から ich hore, daß er kommt の如き経過をとって分離して来たものの如く、Frnhd. 時代は両者が殆んど混用され、ルターの九月聖書でも、極く一部に dz で daß を表している他は、大抵 das で両者を表している。Hans Sachs では共に das で区別はされていない。

3. ph, rh は別系統であるが、ch, th に現在も残っている子音の後の h は、14Jh. から始まって居り、15Jh. には可成り拡がった。

4. Inlaut 及び特に Auslaut の m に添える b は、Analogie として生じたものである。即ち b (又は m, p) の前の n が mb と書かれた歴史的綴字法から、逆に m の後へ b を付けるという類推が生じた。この形は 15Jh. 後半から盛んになっている。reichthumb (Reichtum), vmb (um)

5. dt は 14Jh. 中頃から屢々現れて来る。todt, hendt (Hände), wordt

6. Auslaut の g が硬音化するしるしとしての gk は、13Jh. 末上部ドイツに、14Jh. 末からは中部ドイツにも現れて、15Jh. 特に広まっている。sorgklich, gefengkniß, -igklich, wegk, magk

同子音の重複

1. zz, kk を表すものとして, tz (cz) が用いられていたが, 13Jh. 後半以来, 此等は単なる z, k の代用となってしまった。

2. 破擦唇音 pf が Inlaut と Auslaut で共に重ねられて ppff となる形は, 15Jh. 後半以来往々用いられた。appffel, koppff  
それ以後は pff の形が Frnhd. の終りまで, pf と共に規則的に使われている。

(註) verdampft の如く, 必ずしも現在の pf と一致しないものもある。H.Sachs  
では scharppff, schimpff, kempffen の如く, 多くは pff 型で, 稀に stümpfiren などが見られる。

p の重複 ppf, pph は中部ドイツにのみ現れ, apphel, schepphen, hopphen, oppfern 等に用いられ, 16Jh 中頃に迄及んでいる。

3. tt 及 mm は, 母音間の短母音の後に用いられたが, tzeytt (Zeit) の如く Auslaut では無意味に重ねた場合も多い。

4. pp, nn, ll, rr も元来母音間の短母音の後に在り, 大抵は古い重子音を現していたのであるが, 純粹に orthographisch な重複としては, 13Jh. 末に現れ, 16Jh. 初頭, 特に頻繁となった。Herr (mhd. hërre), Narr (mhd. narre), Hölle (mhd. helle), Sippe (mhd. sippe), Tanne (mhd. tanne) 等の古い重子音に対するものとしては, この時代に gollt, engell, vnnd, vonn 等が可成り遅くまで使用されている。

5. 短母音の後の bb, dd は専ら中部及低地ドイツのものであり, この地方の方言の特徴をなしている。Nhd. に用いられている bb, dd も, 語原的に此等方言から来たものが多い。Kladde < mmd. kladde, Ebbe < mnd. ebbe

6. ff, ss は既に 13Jh. 末から現れているが, 或る地域では, 無声摩擦音を ff, ss, で, 有声摩擦音を f, s とする区別もあった。

その他の子音

**b** 両唇摩擦音 *w* の代りとしての *b* は、Anlaut で Frnhd. の初期、屢々バイエルン及ニルンベルクの写本に現れている。berfen, gebinnen, bunderlich, burden

又 15Jh. になっても中部ドイツ方言に時たま見られる。

**c** Anlaut の *c* は、本来のドイツ語 *k* の代りとして、Frnhd. 初期、Mhd. 同様極めて屢々 *l*, *r* の前に用いられた。clagen, cleid, clein, crafft, cranck, crieg 然し後には *k* に駆逐されている。之に反して外来語では Frnhd. の終りまで規則的に残っている。

Ahd. 時代に入ったものとしては、capitel, capelle, closter, creutz, costen, cammer 等があり、Mhd. 時代には camel, coerper, cardinal, creatur, cronik 等が採り入れられているが、就れもこの時代には未だ純粹の外来語として扱われている。

**ch** は摩擦喉音の他に、部分的ではあるがシュワーベン地方アウグスブルクで、14, 15Jh. 頃、破擦喉音 *kx* のしるしとして使われている。chind, chünig (König), chomen, chnecht, chlain, chrafft; chranchen, sinchen, junchfraw

此等は後に *kh*, *kch*, *ckh* と書かれるようになった。

**f** *f* と *v* は Anlaut で同一の摩擦唇音を表す同価値のしるしであった。14, 15Jh. の写本・印刷では、未だ多分に Mhd. の書法が通用して居り、通常 *f* は子音 *l*, *r* 及母音 *u* (*uo*), *ü* (*iu*, *üe*) の前、*v* は他の母音の前に vallen, veder, vinden, volck の如く用いられた。然し 15Jh. 中には、之と並んで *f* も使われている。

**g** *g* は三つの音価を持っていた。即ち、

Orthographie の変遷から見た Neuhochdeutsch の成立

1. 柔閉鎖喉音 [g] のしるしとして,
2. 之と並んで大部分の地域では口蓋摩擦音 [ç], 或は摩擦喉音 [x] のしるしとして,
3. 同じ地域で Inlaut の母音間に於て, 元来半母音的な Übergangslaut [j] のしるしとして使われた。Ndal. 方言はこの j 音を最もよく保存していたので, この書法も最も頻繁に現れて来る。この地方の印刷中心地バーゼルで出版されたものには, 1530年頃まで普通に見られる。  
wegen (wehen), negen (nähen), segen (säen), dregen (drehen),  
bruegen (brühen)

**h** 同じく三通りの用途があった。

1. Anlaut では呼気音 [h] であるが,
2. Inlaut の母音間では, 既に夙くからサイレントして居り, 特に中部ドイツ方言では, 綴りの切れ目を示すしるしでしかなかった。
3. Inlaut で子音 t, s の前, 及び流音 r, l の後で。Mhd. と同様, 摩擦喉音 ch の代りとして用いられた。naht, kneht, nihf, sieht この用法は上部ドイツで特によく使われている。

バイエルン方言では kh, ckh, kch (chk), 稀に gkch, gkh が破擦喉音のしるしとして 14Jh. 後半以来使用され始め, 最初は殆んど Inlaut と Auslaut のみであったが後には古い ch を完全に排除して Frnhd. 時代中存続している。

**ph** は破擦唇音のしるしとして, 14Jh. 末まで概ね支配的であったが, ラインフランケン方言を除き, 15Jh. には pf によって駆逐されている。

**g qu** として用いるのは今日と同じである。

**f** と **s** との使い分けが現在の如くなったのは 14Jh. 末からである。

**w b** の部で述べた如く, 初期 Frnhd. のバイエルン, エルンベルクの

写本は w と b を混同して居り、b が w の代りに用いられたと同様、w を b の代りとしても使用している。gewlasen, warbarei, offenwar

x 特に上部ドイツ地方でそうであるが、14Jh. 末頃 x は Inlaut と Auslaut の gs (gz), cks (ckz) 及び特に chs (hs) の代りとして屢々書かれている。印刷でも 17Jh. まで残っている。

z Mhd. に於けると同様、二重の意義を有していた。

1. 破擦歯音のしるしとしての用法は Frnhd. 時代は、殆んど Anlaut に制限されていた。tz は之に反し、Inlaut 及び Auslaut にも一般的に用いられている。
2. 摩擦歯音のしるしとしては、mhd. ʒ の代り文でなく、時には mhd. s の代りとしても使われ、両者とも Inlaut, Auslaut に於て 15Jh. 前半まで極めて頻繁に現れる。wazzer, schlüzze, lazzen, grozzen, daz, ez, biz, allez

以上概観した如く、Frnhd. 時代は統一した言語を持たなかったと同様に、又綴字法も混沌そのものである。後世になって或程度統一された綴字を通じて見る Ahd. や Mhd. の文献に慣れた我々は、この時代に到って、余りに雑多な流儀で綴られた文献を前に、只呆然とするばかりである。この時代の文献を Orthographie の面から調べようとする時、思いがけない障碍に遭遇する。即ち後世の Lesebuch や全集その他を手にする時、Orthographie が果して出版当時そのままのものであるかどうか、多くは何の断りもないのが普通の様である。たとえ出版当時のままに綴字が保存されてあったとしても、それが著者の Orthographie であるか、それとも出版社の流儀に従ったものであるか、多くの場合知る術がないのである。

## Orthographie の変遷から観た Neuhochdeutsch の成立

今、Frñhd. 時代の各方言領域が有していた印刷の中心地を列挙してみると、

### I. 上部ドイツ

1. (バイエルン方言) ウイン, インゴルシュタット, ミュンヘン
2. (シュワーベン方言) アウグスブルク, ウルム, チュービンゲン,  
更に 17Jh. にはシュツットガルト
3. (アレマニッシュ方言) 低地部はシュトラスブルク, バーゼル  
高地部はチューリヒ, ベルン

### II. 上部と中部の境界地帯

1. (ボヘミア方言) プラーク
2. (ニルンベルク方言) ニルンベルク

この地方は 16Jh. 中葉迄バイエルン方言に近く、それ以後は中部ドイツ方言に近づいている。

3. (東フランケン方言) バンベルク, ヴイルツブルク

### III. 中部ドイツ

東部では 1. (ラインフランケン方言) マインツ, 但し 16Jh. 中頃  
からフランクフルト・アム・マインに移る。

2. (中部フランケン方言) ケルン

西部では 1. (チューリーングェン方言) エルフルト, イエーナ

2. (上部サクセン方言) ライプティヒ, ヴイテンベルク, ド  
レスデン

3. (シレジア方言) ブレスラウ (特に 17Jh.)

### IV 低地ドイツ

マクデブルク, フランクフルト/オーデル, ベルリン

17Jh. からハムブルクも之に加わる。



### Orthographie の変遷から観た Neuhochdeutsch の成立

低地ドイツの口語は、この頃迄に独自の発達をとげ、高地ドイツ語とは相当な開きを示しているが、文語は特に東中部ドイツの文学語を基礎とし、その他の諸方言に影響されている。

V. その他、地域外の印刷所としてはアムステルダムがある。

以上の印刷中心地は、同時に官庁所在地であったり、文学の中心地であったりするものも含まれている。この様に諸地方に点在する印刷の中心地が、それぞれの方言をそれぞれの綴り方で表していたとすれば、Frnhd. 時代にはドイツ語は存在しなかったも同様と云えないことはない。唯この混乱の中から、Nhd. につながるものを見出そうとするならば、当然ルターの著作に目を向けなければならない。Frnhd. は、その中に Mhd. の遺跡を発掘し、Nhd. 萌芽を発見する場所としてのみ、語学史上にその重要な位置を保つことが出来るのである。

ルターの遺した多くの著作のうち、大部分は未だラテン語によって書かれているが、1520年発表の三大文書（「ドイツの基督者貴族に寄す」、「教会のバビロン俘囚」、「基督者の自由」）を契機として、著書も大衆に訴えるものとなり、従ってドイツ語で書かれる様になった。1922年九月聖書完成までの此の二年間は、ルターのドイツ語に於ける最初の、従って最も注目すべき時期であるが、この期間に著された上述の三大文書・書簡集その他を調べてみると Orthographie の上からは九月聖書に比して左程著しい差違は認められないことが判る。ルターが聖書翻訳のために費した言語上の苦心は既に遍く知られているし、又実際、九月聖書のドイツ語は、それ以前の彼のドイツ語とは語彙、構文の上にも異なるものが看取される。而るに Orthographie は、もとのままであった。恐らくルターは、言葉に於て出来る丈多くの人々に理解され親しみ易いものを選ぶ様苦慮したと同様、Orthographie に於ても亦、各地方の人々は理解され易いことを願ったこ

Orthographie の変遷から見た Neuhochdeutsch の成立

とは思われるが、それにしても綴字の統一は未だ彼の念頭には無かったかの如くである。一例として最も頻出する語の und を、九月聖書の中から拾ってみると次の如くである。

und に対しては vnnd, vñ, vnd, vñd の四種類が使われて居り、或は反復し或は交替して現われて来ている。その割合を表示してみると、

	Matt.	Marc.	Luc.	Ev. Joh.	Ges. Vorr.	Rom.	Rom.
vnnd	47%	33%	26%	20%	37%	6%	12%
vñ	19	11	24	28	11	22	48
vnd	31	56	50	52	52	75	64
vñd	3	0	0	0	0	0	0

(他に und が全体を通じて一例)

一般的に見て、vnnd は後になる程使用度が少くなり、vnd が最もよく用いられて居る事、vñd は最初だけで用いられなくなったこと、その他種々注目すべき現象が、この表一つから幾つも抽出し得るのであるが、これ等が印刷者に依って恣意的に選ばれたものでなければ、ルター自身が此等を synonym の如くに操っていたと解さねばならないであろう。

同じく und に就いて同一綴が反復して現れる例を挙げてみると、

………vñ er rieß yhn. Bald liessen sie dz schiff vñ yhren vatter/vñ folgten yhm nach. (Matt. 4. 21, 22)

Vnnd Jhesus gieng vmb her ym gantzen Gallileyschen land/leret ynn yhren schulen/vnnd prediget das Euangelion vñ dem reych/vnnd heylet allerley seuche vnnd kranckeyt ym volck/vnnd seyn gerucht erschall yn das gantz Syrien land/vnnd sie………

(Matt. 4. 23, 24 上の文の続き)

交替していろいろの und が現われる例としては、

Vñ er stund auff ynd nam das kyndlin vnnd seyne mutter zu sich/ (Matt. 2. 14)

Vñ haben geforschet/auff wilche vnnd wilcherley zeyt deuttet der geyst Christi/der ynn yhn war/vnd…… (Pet. 1. 11)

次に九月聖書に於ける Orthographie 就いて、個々に観て行くことにする。

句読点として用いられているのは、殆んど Punkt, Virgel, Fragezeichen の三種であり、この中で Virgel が数種の役目を兼用して、句読点の不足を補っている。即ち Komma の役目として文法的文肢を分けるだけでなく、朗読者に休止の目印を与えるためにも使用されて、中世的な用法を兼ね備えている。又、引用符としても利用されている。

……ynn den Gottis kasten/Er sahe aber auch eyne arme witwe/  
die legt zwey scherfflyn eyn/vnd er sprach/warlich ich sage  
euch/disze arme witwe hat mehr deñ sie alle eyn gelegt/deñ  
dise haben…… (Luc. 21. 1—4)

この文に於て、最初の / は Punkt に当る休止符、二番目のは Komma として、三番目のは現代語訳では Punkt になって居り、Komma と休止符の役目を兼ねたもの、四番目の / は確かに Anführungszeichen であるが、現代語版では ; になっている。次の Virgel も „——“ 又は ,——' に当るものである。之に反して Punkt の使用は極めて制限され、章節の終りに大段落のしるしとして使われているのが大部分であるが、中には Doppelpunkt 又は Anführungszeichen の役目で用いてある場合が認め

られる。例えば,

Vnd er antwortet vnd sprach Es ist geschriebē. Der mensch  
wirt nit vō dem brott alleyn lebē/sondern von eyne iglichen  
wort/das durch den mund gottis gehet.

マタイ 4 章 4 節の有名な箇所であるが, sprach の次に何等記号がない  
のに反して, geschrieben の内容は Punkt で区切られている。Es を大  
文字書きしているのは, 前に欠けている句読点を補う古い用法を踏襲した  
ものとして注目される。Fragezeichen の用法は略々現今のそれと同じで  
あるが, 例外的に奇妙な場合もある。

sihe/wie ist der mensch eyn fresser vnnd eyn weynseuffer vnd  
der tzolner vnnd der sunder gesell?

現代語訳聖書に依ると, この部分は,

Siehe, wie ist der Mensch ein Fresser und ein Weinsäufer, der  
Zöllner und der Sünder Geselle! (Matt. 11. 19)

これは, ? が, / の代りに使われたわけではないが, 間接疑問文に往々 ? を  
付する古い用法が残っているものと見るべく, 現代語訳の場合は, siehe  
の命令形, wie 以下の感歎文形に応じて, / を加えたものであろう。

: の使用は極めて稀であり, 比較的大きな段落を示すためのものは現今の  
; より寧ろ Punkt の一段上のものと解せられる。

Du heuchler zeuch am ersten den balcke ausz deynem auge/  
darnach besihe/wie du den spreysen ausz deyns bruders auge  
zihist :

Yhr sollt das heylthum mit den hunden geben/……(Matt 7. 5)

現代語訳では: の代りに Punkt である。

而るに他の部分では、

Paulus eyn Apostel Jhesu Christi : durch den willen Gotis/vñ  
bruder Timotheos.

Den heyiligen zu Colossen/vnd den gleubigen brudern yñ Christo.

(Kolos. 1. 1)

この部分は現代語訳で、

Paulus, ein Apostel Jesu Christi durch den Willen Gottes, und  
Bruder Timotheus den Heiligen zu Kollossä und den gläubigen  
Brüdern in Christo.

ここに到っては：の用法も心理的なものとしか考えられないであろう。同様の例として、

Paulus eyn Apostel Jhesu Christi : nach dem befehl Gottis vnsers  
heylands/vnd des herrn Jhesu Christi/der vnser hoffnung ist.

(Tim. 1. 1 befehl は原典のまま)

二つの相似た用法は、両者の：が決して偶然ではないことを教えるが、さりとて決定的な法則を示すには不十分といわなければならない。

( ) は後の部分ほど屢々現れる様になるが、曖昧な用法もあり、現代語訳には全部は採用されていない。

Von Apollo aber (wisset) das ich yhn seer viel ermanet habe/  
das er zu euch keme mit den brudern/vnd……

(1. Kor. 16. 12)

現代語訳では、

Von Apollos, dem Bruder, aber wisset, daß ich ihn sehr viel  
ermahnet habe, daß……

省略符号では上に付ける～が最も頻繁に現れ、通常はnの代用とされて

いるが、m の代りにも Jherusalē, Christū, genōmen, kōmen の如く使用されている。d の代りとしては、専ら vñ (und) に限られる。er の代りとしての ' は、d' が最も多く、稀に kind', brud' の如きものも見られる。此等の省略符号は、すべて省略しない形と併用されて居るのであり、而も vñ を除いては、その比率は遙かに低いものである。(vñ の比率については前記の表を参照)

語の分離をも極めて気紛れに行われて居り、hyn aus gangen と hynaus gangen が続いて現れたり、morgen land (又は morgē land) と morgenland, 更に du を語尾に含めた kanstu, denckistu 等、甚だしく不統一である。

大文字の使用も未だ可成りの動揺を見せている。単語に於ては固有名詞の大文字書きが既に殆んど完全に実行されている他、Gott, Engel, Christen, Sabbat 等の神に関するもの、又その形容詞 Gottlich 等に用いられている。

文頭の大文字が必ずしも前に Punkt や Virgel を伴っていないことは、Punkt の用法の箇所ですべて述べた通りであるが、今一つ例を挙げると、

du hast eyn grossen vorradt auff viel iar/habe nu ruge/issz/  
trinck/sei frolich Aber Gott sprach zu ihm/

(Luc. 12. 19 Aber 以下は 12. 20)

例外的に各列伝の最後に使われる Amen を AMEN とした例が見られる。以上の大文字用法は、固有名詞と Gott を除いた他は、就れも確定的でないのは、他の句読点符号の場合と同様である。

長音表記も甚だ不安定であるが、次の諸例に見る如く、併用や例外が多い。

## Orthographie の変遷から観た Neuhochdeutsch の成立

### 1. 二重母音

Nhd. と同じもの meer, schnee

Nhd. と異なるもの seer, neeren ; tzeen (Zähne), tzween (Mhd. の男性数詞 zwēne から来ている。)

### 2. Dehnungs-h

sehen, geschehen, zehen (zehn), zihen の如く、古い h を有するものはそのまま保存されて居り、又 krehen の如く、Ahd. krāhen, Mhd. kraejen 又は kraen で古い h を殆んど消失してしまっているものでも h を復活しているのは語原的根拠に依るものであろうか。純粹の Dehnungs-h としては、mehr, ehe, ehre, yhm, rohr 等がある。この h を用いていない用例も多いが、素より現行の h が古い h に基いていない場合に限られている。

on (ohne), leren, stelen, ermanen, wonen, rhumen, nam, hane (Hahn), ruren (rühren), fart (Fahrt)

特殊な例としては、schriehen (schrieen), befelh がある。後者は変化も befilht, befolhen であり、Ahd. bifēlhan からの古形を保存しているものと解せられるが、当時の発音は既に今日の befehlen になっていたと思われる。

### 3. Dehnungs-e

ie のうち、古い複母音 ie からのものは、そのまま、hielt, dienen, priester, niemand, lieben, wie と書かれているが、例外的に viel (mhd. vil) sieben (mhd. siben) の如きものもある。現今の ie は、古い短母音の場合、そのまま widder, nyder, dise, fride, tryben (mhd. triben の複数過去 triben, nhd. trieben)

然るに bleyb (blieb), schreyb (schrieb), bescheyden (beschieden)

### Orthographie の変遷から見た Neuhochdeutsch の成立

の様に hielt と同じく、古い複母音 ie を持つべきものが ey と書かれている例もある。稀には又、stuel (stuhl) の如き、Dehnungs-e の旧式な用法も見られる。Fuß を fuesz と綴っているのも同様と思われる。

### 母音の Orthographie

v と u の交替は最も著しい特徴をなして居る。Anlaut の u は v で表され、vmb, vnter, vber, vnd, vns となって、本来の f 又は v と区別されない。即ち、volck, von; vleysz, bevelh 等と同じ音価として表されている。逆に、Inlaut 母音間の v は u となり、Euangelion, Daud, tzuuor, beuehl となっている。複母音 au 又は eu には時に aw 又は ew を用いて居り、schawen, glawbe, trawm; hawte, erfrawet (erfreut); ewr (euer); hewpbt (Haupt) 等が、hausz, auff, freund 等と併用されているが、後の各伝になる程、w の使用は見られなくなる傾向にある。

ie 又は i に対して ei 又は ey と綴ることのあるのは、既に長音表記の簡条で示した通りであるが、i に代る ey としては、entweych, ergreyff (ergriff), zu reys (zerriß) などが見られる。i 又は ie を y としたものは、極めて多く、ei > ey も含めると、

deynen, eyn, steyn, tzeygen, reych; yhm, yhre, dyr, wyr, nyder; hymel, hyn, byn, gewynnen など多数にのぼる。此等の中で極めて規則的なのは ey であり、bleiben, reichen の如き ei 綴は、僅かに見出されるに過ぎない。ynn (in), yhm, yhn, yhr, hyn の様に頻出する語は、綴字が良く統一されて居り、逆に ich, sich, -lich, -ig, ist, nicht 等も動揺が容易に発見されないが、その他の語では wirt: wirt, kynd: kind の如く併用が行われている。例外的なものとして、ie を eu



で表したものもある。verleuret (verliert)

但し、この場合は音韻的原因に依るものであることは勿論である。(「独  
仏文学研究」vol.1 拙稿「九月聖書に現れた Konjugation」参照。)

j の使用は比較的少く、固有名詞の Jhesu, Johanne, Joel 等は  
大文字で書かれてあるため i と区別がないが、ia, iung, iensyd (jenseit)  
等今日の j は殆んど i で表されてあり、極く稀に、jh の形で jhener,  
jhensytt (jenseit) などが見られるに過ぎない。

Umlaut 記号は全く脱落して居り、ö=o, ü=u, äu=au 又は ew の  
他, ä=e (äh=ee 又は e), ö=e 又は u となっている。

konig, horen, schon (schön). morder, sone (söhne), zolner,  
allerhohisten ; vben, vbir (über), vngestum, thur, iungling,  
sunder ; auszersten, trewmen, gepew (Gebäu) ; megde, teglich,  
menner, schetze, seen ; schweren (schwören), hellischen ; vn-  
muglich, gewunne (gewönne). versunen (versöhnen)

äh は通常 ee で表されているが、erwelet (erwählt) の如きもの  
もある。

短母音 e は極めて屢々 i で代えられて居り、wilcher, Gottis, vbir,  
offinbar, kilch, eynis, -ist (二人称単数現在語尾及最上級語尾) 等が現れ  
るが、eynes, sihestu の如き併用例もある。又語尾に来る e は solchs  
の如く略されを場合もあるが、動詞の変化語尾 t は e を伴うことが多く、  
horeten, erwelet, bawete, gelernet, prediget, samlet 等の用法が、  
bleybt, ertzeygt, kompt (kommt), wolt, gibt 等より、比率的に多  
い。es は Apostroph なしに habs, ichs, ists の如く縮合されている。

この他稀に odder の代りに adder と書かれている場合があるが理由は  
明らかでない。

以上はルターの Orthographie について、現代正字法と異なる点を主と

### Orthographie の変遷から観た Neuhochdeutsch の成立

して観察したが、当時勢力を獲つつあった上部ドイツ語 (Oberdeutsch) 的な所謂共通ドイツ語 (das Gemeine Deutsch) から、東中部ドイツ語 (Ostmitteldeutsch) に立脚したルターが、如何に脱皮し又同時に之を吸収しつつあったか、従って Nhd. に接近しつつあったかを Orthographie の面から観ることにする。

Mhd. の *uo* に対して、彼は Obd. の *û* を採用せず *u* を用い、同じく Mhd. *üe* に対しても Obd. の *üe* 又は *û* を採らず、故郷の流儀に従い *ü* を用いた。但し之は Orthographie の上では、既述の如く *v* 又は *u* で表されている。

例 Mhd. *üben* > *vben*

Mhd. の複母音 *ie* は Obd. でバイエルン方言の *ia* の如く、複母音として保たれているが、ルターは *e* を *Dehnungs-e* として用いた如くであり、古い *ie* と並んで *viel*, *sieben*, *wiese* (mhd. *wise*) を用いている。又古い長母音 *i* は Obd. で既に複母音化して (diphthongieren) *ei* となっていたが、古くからの *ei* は之と区別して *ai* と書かれていた。ルターにはこの区別はなく、すべて *ei*, *ey* で表されている。然し古い長母音 *i*, *u*, *û* を未だ単母音として保存している地方も多いのに、ルターは共通ドイツ語に従って複母音化した *ei*, *au*, *eu* を用いて居り、又、故郷の方言による *gleuben*, *teufen*, *heupt* 等を間もなく棄てて Obd. に従い *glauben*, *taufen*, *haupt* を採用するなど、その態度は実に融通無碍である。この他 Obd. に保存されている古い *u* と *û* の代りとして時に *o* と *ö* を用い、今日の *Sohn* (mhd. *sun*), *kommen* (mhd. *kumen*), *König* (mhd. *künig*) の如き形が生じている。Ostmd. の方言で *i* が *e* に転化しつつあったが、之もルターは退けている。Auslaut の *e* は Obd. に比するとルターに於て遙かに良く保たれている。(例 *name*, *speise*, *rede*)

## Orthographie の変遷から観た Neuhochdeutsch の成立

Ostmd. の官用語に従い、語尾の es は最初往々 is と書かれたが、之は後に Obd. に従い放棄された。

### 子音の Orthographie

b は Obd. の P で屢々代られている。A. Bach の Geschichte der deutschen Sprache § 128 には、決してこの様なことがなかったとあるのは不可解であるが、九月聖書に於ては珍らしくなく、pus (Buße), gepott, geporn, gepure (gebäre), verporgen, verprennen 等の例がある。就れも Anlaut 的位置である所から、無制限に使われたものでないことが判る。

ch は稀に h の役目で geschach, g の代りとして zoch 等に用いられている。前者の h 音は古くからの実音であったから、この場合は h と g の両者が共に同音価を有し、ch で表されていたとも観られる。

d は往々 t で代えられている。wirt (wird), schneytten, thum (dumm), verterben, niemant

逆に rads, weyndrawben の如き場合もある。

g の代りに k を用いたものとして Kriechen 及その形容詞があり、語尾の -ig は次に -keyt が来ると結合して -ickeyt となっている。

h は Anlaut で省かれる時があり, erausz (heraus), erbey (herbei), erabe (herab) 等が見られる。h を ch に用いた場合 nehisten の如きもあるが、逆に ch で h を強めていることが多い。sich zu (sieh zu), schuch (schuh), rauch (rauh)

k は creutz の如く c で表される時と, dencken, volck の如く ck と綴られる時とある。-igkeit, -lichkeit は概ね ewickeyt, herlickeit の様に縮められている。

Orthographie の変遷から観た Neuhochdeutsch の成立

m は mb, mp と書かれる時があり, um は専ら vmb であるが, mm となるべき所に屢々 mp が使われる。(kompt, verdampt, nempt)

r が同音価の rh で代用されている例としては, verrhedt, verrhaten, verrhiete の類に限られている様である。

s の代りに sz 乃至 ß が使われている例としては, szo, alszo, szondern, ausz, bisz, szon (sohn) 等多数にのぼるが, 逆に今日の ß が s となっているものは, lies (ließ), heyst 等比較的例が少く, 大部分は ss で表されている。中には sz を強めた形として ssz となっているものもあり, sassz, fuessz (Fuß), meerissz(meeres), 之は sch の場合も tissch, fissch の如き綴で表されている。das 又は daß を dz と表したのは寧ろ一種の省略記号の如きものと見られる。

t は tt, th, dt が混用されて居り, sindt (sind), seytt (seid); todt, thur; Got, Gott; rast, radt; treten, treten 等が不規則に現れて来る。

z は tz でも表され, tzeytt, tzornig, hertzog, gantz 等が併用されている。sz は既に現在の ß の如く ss として用いられて居り z の音価を有して居なかった。zu- は zer- の意味であることも多く, zu treten (zertreten), zu reyssen, zustossen, tzubrechen 等がそれに該当する。同様に fur- は全く vor- の意であり, vor- の代りに ver- を用いている例もある。前置詞の vor も, やはり fur で表されて居り, 次の文例はそれである。

Nach myr wirt komen/der fur myr gewesen ist/denn……

(Ev. Joh. 1. 15)

vnd du furchtest dich auch nicht fur Gott/der du……

(Luc. 23. 40)

Orthographie の変遷から観た Neuhochdeutsch の成立

für との混同の惧れは殆んどなかった。für という前置詞の使われることが極めて僅かであったからである。この意味に fur を用いた例としては  
Aber das gepet geschah fur ihn zu Gott on vnterlas von der  
gemeine/ (A. Geschichte 12. 5)

この部分は現代訳で可成り書換えられているが、

; aber die Gemeine betete ohne Aufhören für ihn zu Gott.  
となっている。

ff, ll, dd, tt, mm, nn の如き二重子音は、その用法に一定の規準なく、vntter : vnter, soltt : solt, vonn : von, ymer : immer の如く併用されているのが普通であるが、auff, widder, alle, ynn, denn の如き頻出語に於て案外固定したものもある。

以上概観した如く、九月聖書に表れた綴字法は、Nhd. 成立の上に二つの基盤を与えている。一つは綴字法そのものが後世に及した影響であり、之は次代のドイツ語の担い手である Opitz, Wieland, Lessing, Goethe, Schiller の綴字法を、ルターの同時代者 Hans Sachs, Zwingli, Kolross や1530年に現れた Züricher Bibel のそれと比較してみる時、一層明瞭となるべきものである。他の一つは、九月聖書が書かれたものとして普及した限りに於て、音韻が綴字法に従属した形で後世に遺された点に注目しなければならない。

最後に、この小稿の資料に用いた九月聖書とは、勿論リプリントのそれであり、ベルリンの Furche から出版されたものである。又、現代語訳とは、die deutsche evangelischen Konferezz に依って採択された改訳版である。

(関西学院大学文学部専任講師)